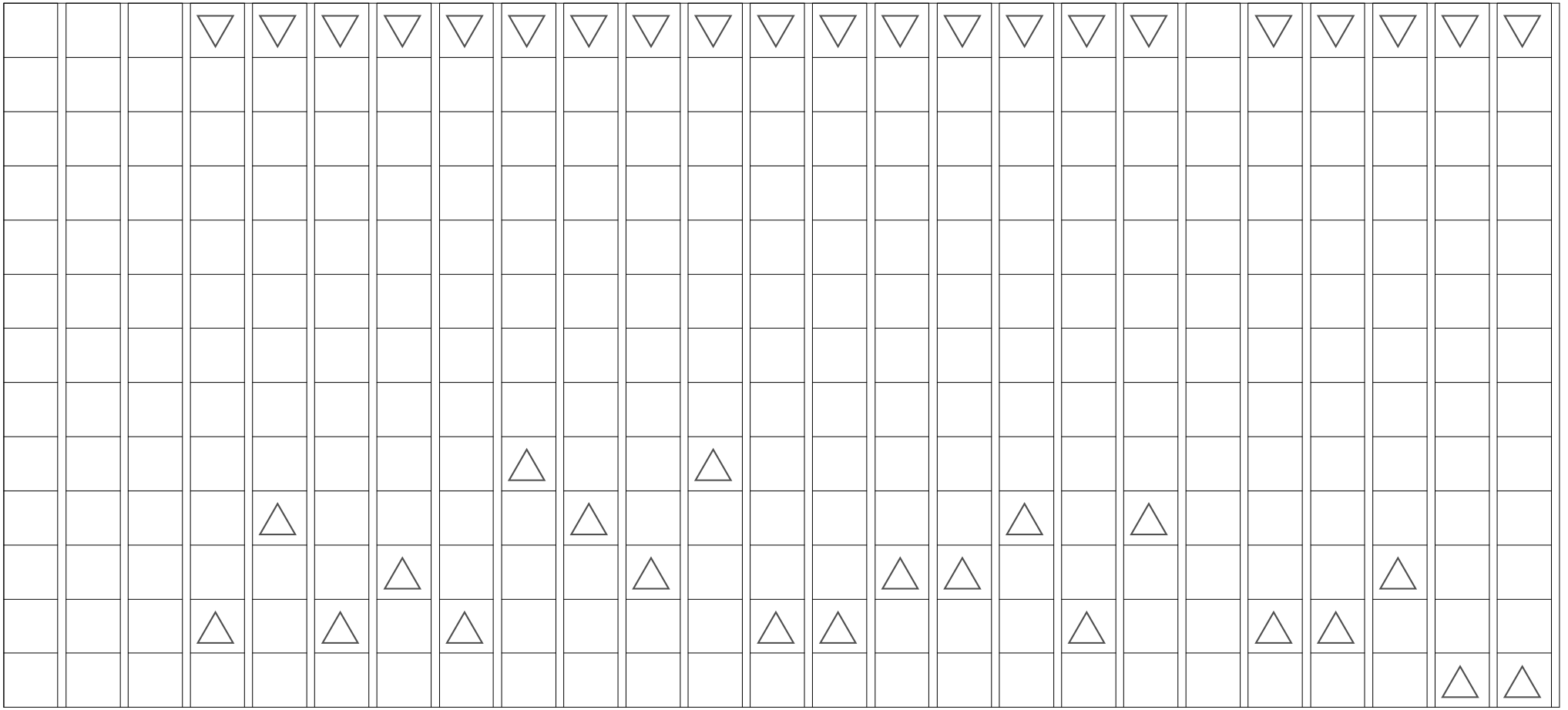
名前【　　】

「曽根崎心中」

近松門左衛門

この世の名残、夜も名残
死に行く身をたとふれば
あだしが原の道の霜
一足づゝに消えて行く
夢の夢こそあはれなれ

あれ数ふれば暁の
七つの時が六つ鳴りて
残る一つが今生の
鐘の響きの聞き納め
寂滅為楽と響くなり
鐘ばかりかは草も木も
空も名残と見上ぐれば
雲心なき水の音
北斗は冴えて影映る
星の妹背の天の河
梅田の橋を鵲の
橋と契りていつまでも
我とそなたは女夫星
必ず添ふとすがり寄り
二人が中に降る涙
川の水嵩もまさるべし